〈研究ノート〉　三浦哲郎作品論

――『白夜を旅する人々』――

近藤洋子

三浦哲郎の長編小説『白夜を旅する人々』が発表されたのは、昭和五六年五月号の『新潮』で、以後三六回に亘り昭和五九年十月号まで断続的に連載された。連載終了直後の昭和五九年十月には、新潮社から単行本として発刊された。昭和六三年八月に『三浦哲郎自選全集第十二巻』（新潮社）に収録、平成四年四月には新潮文庫として刊行された。また、昭和六十年には第十二回大佛次郎賞を受けている。

小稿では、三浦哲郎の家族におこったできごとを踏まえたこの小説が、事実を押えながら、自伝小説にとどまらず、如何にして小説として普遍化させたのかをみてゆきたい。

1.

『白夜を旅する人々』のあらすじは、およそ次のようである。

東北の港町の呉服屋山勢を営む山科家の五人の子どもの内、長女るいと三女ゆうは先天性色素欠乏症で弱視であった。六人目の子（羊吉）誕生を、皆が不安を抱きながら待つところから始まる。羊吉が普通の子に生まれた後、長男清吾は店を継ぐ決心をして叔父の百貨店に修業のために住み込む。次男章次は東京芝浦の高等工業に入学し、長女るいは琴で名をあげ、箏曲教授として三女ゆうとともに近所の稽古場に移る。女学校を首席で通し東京女子高等師範を受験しようとしていた次女れんは、夏期補習授業で遺伝の講義を受けて前途に絶望し、受験にも失敗して、羊吉の満三歳の誕生日に投身自殺をはかる。清吾はれんの自殺に打撃を受けるが、湯治場で知り合い、偶然同じ店で働くことになった田所苗との新しい生活に希みを託す。しかし、苗が堕胎に失敗し命を落とすと、耐えかねて四月半ばに家出をする。るいは妹れんの自殺と兄清吾の失踪は、自分のような身体のものがいるからだとして、半年後の秋に服毒自殺をする。残された三人の兄妹、章次、ゆう、羊吉が母きぬとともに、町から逃がれるようにして温泉場へ馬橇で向かうところで小説は終る。

「白夜」とは、助産婦名越はなの助手民子から聞いた、助産婦の次男が欧州から送った白夜の絵葉書の話から、るいが創った詩の一節「暮れるでもなく　暮れぬでもなく／眠れるでもなく　眠れぬでもなく／ただ深い井戸の静寂に包まれて／寝返りを打つばかりの白々とした夜」を指していると考えられる。

では、小説の下敷になっている事実はどうであろうか。まず、三浦自身の編になる年譜（『おろおろ草紙』講談社文芸文庫　二〇〇〇年九月一〇日刊）からみてゆきたい。出生については次のように書かれている。

「一九三一年（昭和六年）三月一六日、青森県八戸市三日町一三番地に生まれる。父壮介、母いとの三男。兄に文歳、益男、姉に縫、貞

子、きみ子がいた。六人兄弟の末弟である。生家は〈丸三〉という屋号で呉服屋をしていた。」

年譜では、この後六年間は記載がなく一九三七年にとんでいる。

「一九三七年（昭和一二年）六歳　満六歳の誕生日に、次姉貞子が青函連絡船から津軽海峡へ入水した。これをきっかけに、兄や姉たちが次々と自滅の道を辿ることになる。夏、長兄文歳が失踪した。翌年秋、長姉縫が睡眠薬自殺をした。」

小説の時代設定は、第十章に羊吉の生まれた年の九月半ば過ぎ「満州事変勃発を報らせるラジオの臨時ニュースが町を騒がせた」とあり、羊吉の生まれたのが、昭和六年であったことがわかる。これは年譜の三浦哲郎誕生日と一致し、小説は昭和六年から始まっていると考えてよい。そして、長姉るいの自殺の翌年一月で終っているから、年譜にはない昭和七年から昭和十一年までを含み、実際には長女縫が亡くなった十三年及び十四年までの八年間を、四年間に凝縮していることになる。

2.

年譜にある兄や姉たちが小説の登場人物のモデルになっている。

作中人物のモデルと、作中人物の羊吉誕生時のおよその年齢は、父三浦壮介→山科勢介（年齢不明）、母いと→きぬ（四十近い）、長男文歳→清吾（十九）、長女縫→るい（十八）、次男益男→章次（中学三年十五）、次女貞子→れん（女学校一年）、三女きみ子→ゆう（十）、三男哲郎→羊吉、である。

モデルになった人物の実際の年齢が、客観的に筆者が検証できたのは現時点では、父壮介氏、母いと氏、次男益男氏、次女貞子氏の四人の方々である。

父壮介氏と母いと氏は、三浦家の菩提寺、広全寺（岩手県二戸郡一戸町）にある三浦家のお墓の墓誌により知ることができるが、それによれば昭和六年には壮介氏四一歳、いと氏三九歳ということになる。次男益男氏とは十五歳の違いがあると、哲郎自身が述べている。（「日本経済新聞」平成九年一月五日「新春幻想」による）。この三人は、作中人物とほぼ同年齢と考えてよい。

さて、次姉れんは羊吉誕生時、女学校一年生の三学期と設定されているが、モデルとなっている貞子氏はどうか。

三日に一度発行された地元紙「奥南新報」昭和七年三月十六日付記事「県立八戸高等女学校合格者名一覧」の中に、三浦貞子とある。実際には昭和六年三月当時、貞子氏はまだ小学校五年生だったことになる。何故、年齢を引きあげたのか。

小説の中で山科家崩壊の発端となる次姉れんの自殺が、羊吉の誕生日に行なわれるのは、れんが羊吉の中に生まれかわるためである。第六章で、生まれて間もない羊吉に、まだ自殺など考えてもいないれんが、「自分のすべてを羊吉に注ぎ込んであげる」と語りかける場面がある。自分は女で、勉強してもせっかく溜めたものをろくに使えないから、全部譲って使って貰うというのである。羊吉が生まれたとき、三姉ゆうは十歳で、末っ子の座を奪われておもしろくなく、皆の関心が羊吉に集まることが不満で、すねる場面があるが、れんが貞子氏と同じ小学五年生に設定されていたら、ゆうのこの心境に近いのではないだろうか。羊吉の誕生日に自殺を決行するための伏線として描かれたであろう第六章のれんの語りは、小学生ではなく女学生である必要があったのである。

次に、三浦家では八年間に起ったできごとが、小説では四年間に縮められたことについて考えてみたい。

羊吉が生まれて二年たった三月、大地震があって、山科家の遠縁の漁師一家が津波で全滅する話（第十四章）が出てくるが、この地震は昭和八年三月三日午前二時三一分に発生した「三陸大地震」で、同時

期、同時刻で取り入れられている。

小説ではその年（昭和八年）の夏に、れんが補習授業で遺伝について学び、前途に希望を失くして、「死んだ方がいいのせ」と思うようになる。そして翌春、女学校を卒業して東京女子高等師範学校を受験し不合格となり、入水して亡くなってしまう。つまり、女学校卒業と、女高師受験は、昭和九年春のこととなっている。

では、れんのモデル貞子氏はどうであったのか。三浦の随筆集『笹舟日記』（昭和四八年五月、毎日新聞社刊）所収の「姉はイルカにまたがって」において、受験した女高師は奈良女高師で、奈良で死を決めたらしいと書いていて、小説では受験校を変えたと考えられる。しかし、女学校卒業と入水の日時は、奥南新報の記事により知ることができる。貞子氏の八戸高女卒業は、昭和十一年三月二十日である。三月廿二日付の奥南新報の卒業式に関する記事によれば、貞子氏は学校賞を受け、総代として卒業生答辞をよみ、「在学中学業優等操行佳良者」「本学年間学業優等操行佳良者」のそれぞれ筆頭に名があげられている。れんは、真面目で非常に優秀な女学生と設定されているが、貞子氏がまさにそのような才媛であったのである。

さて、小説の最も大きな転換点が、れんの自殺である。その第一報がもたらされるのが第二九章で、つづく第三十章において、清吾が東京から急ぎ帰宅した章次に、れんの自殺を報ずる新聞記事を見せる場面がある。小説中の新聞記事と、貞子氏の自殺を記した奥南新報（昭和十二年三月十九日付）は、ほとんど同じ内容といってもよいほどである。しかし詳細に比べてみると次の十箇所に相違がある。いま、相違を一覧にすると次のようになる。〈白〉は小説を〈新〉は奥南新報を表す。

(一)〈新〉丸三呉服店　〈白〉山勢呉服店
(二)〈新〉市内三日町十三番地　〈白〉町内大通り十五番地
(三)〈新〉三浦惣助　〈白〉山科勢助
(四)〈新〉貞子（一九）さん　〈白〉れん（一八）さん
(五)〈新〉貞子さんからの手紙　〈白〉れんさんからの手紙
(六)〈新〉船客名簿　〈白〉船室名簿
(七)〈新〉東京市松並區高圓寺彌次地良子（一九）
　〈白〉青森市内青森師範学校女子部寄宿舎内須藤れん（一九）
(八)〈新〉（現金五円二錢在中）　〈白〉（現金五円二十錢在中）
(九)〈新〉十六日發賣八戸函館間三等乗車券、萬年筆一本で／津輕海峡に投身自殺をしたのは三浦貞子さんらしいといふので八戸署に照會の結果本人と判明したが
　〈白〉万年筆などのほか、十六日発売の本町より函館までの三等乗車券があり、また雑誌の裏に山科れん所有と書き込みがあるので、師範学校女子部寄宿舎および本町警察署に照会の結果、津軽海峡に投身自殺をしたのは山科れんさんと判明したが、
(十)〈新〉貞子さんは昨年八戸高等女学校を優等で卒業し高等女子師範に受験したが
　〈白〉れんさんは本町の高等女学校の優等生で、今春、東京の女子高等師範を受験したが、

以上の十箇所が相違する。

この内でいま問題にしたいのは、(十)である。貞子氏が高等女学校を卒業したのが「昨年」とある。前述の貞子氏の女学校卒業式を報じた記事が昭和十一年三月であったことと一致する。貞子氏の女学校卒業は、哲郎が五歳のときなのである。女子高等師範学校を受験したのが、奥南新報の記事では、昨春なのか今春なのかがはっきりしないのだが、貞子氏の受験時期について、三浦自身は「私の履歴書」（「日本経済新聞」平成十二年十一月三日）において、「貞子姉が突然その日（昭和十二年三月十六日）に死んだからである。姉は、べつに重病を患っていたのではなかった。それどころか、つい何日か前に受験の旅

から帰ったばかりであった。」と書いている。つまり、貞子氏は卒業して一年の後に入水されているのである。

小説では、れんは卒業したその春に女高師を受験し、その直後、羊吉六歳の誕生日に自殺をする設定に変えられている。

次に長姉るいの服毒自殺について考えてみたい。るいは、れんが自殺し清吾が失踪した同じ年の秋に、自殺する設定になっている。しかし、るいのモデルになった哲郎の長姉縫氏は、前掲の年譜、昭和一二年の項にあるように、翌年昭和一三年秋に亡くなっておられるのである。実際に、広全寺にあるお墓の墓誌には、「清韻妙縫良善大姉　昭和十三年十月十二日　縫子」と刻まれている。享年は隣に刻まれている貞子氏と同様に、記されておらず、省かれたのかもしれない。

さて、縫氏はみてきたように、貞子氏逝去、文蔵氏失踪の年の翌年に亡くなっていて、実際のモデルたちのできごとは、貞子氏の女学校卒業の昭和十一年春を起点とすれば、縫氏の亡くなる昭和十三年秋まで、足かけ三年間に起こったことである。しかし、小説ではるいは、れんの自殺、清吾の失踪と同じ年に亡くなっている。

つまり、一年の間に、れんの女学校卒業と死、清吾の失踪、るいの死が描かれているのである。

3.

これまでみてきたような事実の時間を改変したことについて考えてみたい。

れんの死を羊吉三歳の誕生日と、事実を改めた点については、既に河合正直氏が読み解かれ、「作者はれんを座敷わらしにして、れんが〈山勢〉の家を出たあと、座敷わらしを羊吉が受け継ぎ、羊吉が〈山勢〉の座敷わらしとして一家の繁栄を守る役割をするという構想から」と述べておられる（「『白夜を旅する人々』序説―執筆予告から連載開始までの九年間について―」平成八年十二月十日発行『常葉国文』第二一号所収による）。座敷わらしについて三浦は『笹舟日記』所収の「座敷わらしの話」において、その正体は間引きされた子供たちの亡霊ではないかという説を紹介している。座敷わらしは、より幼い方が相応しい。第二八章の、れんが着物の袖と袴の裾をひらひらさせながら家を出る場面で、清吾が座敷わらしが家を見捨てて出てゆくときにそっくりだと思うのだが、れんが座敷わらしを羊吉に受け継がせたという河合氏の説は、羊吉が三歳に改められていて説得力をもっている。

ただ、『白夜を旅する人々』（傍点筆者）と題した作者は、れんから羊吉へ座敷わらしをバトンタッチさせる構想はあったとしてもそれだけでなく、山科家の人々、ある血縁の人々の物語を描きたかったはずである。

全体の三分の二にあたる第二八章でれんが家出するまでの間、作者は兄姉たちの心の動きを丁寧に描出し、それぞれの人物を造型する。それが第二九章のれん入水の一報から苗の死、清吾失踪、るい服毒死と矢継ぎ早に事件を起こした。小説の緊張感を保つために、れんは女学校卒業の年に女高師受験、失敗、自殺とたたみかける。これが、貞子氏の事実に沿う形で、卒業後一年後の自死であったなら、この間のことを描かざるを得ず、山科家の家族の物語というよりも、れんの物語になって矮小化されてしまったであろう。また、同様にるいの死も、妹の死の翌年に設定しその間を描くことになれば、物語が冗慢になったのではないだろうか。

『白夜を旅する人々』は、初期に発表した自伝的小説群（「忍ぶ川」「恥の譜」「初夜」「帰郷」など）とは異なり、自身の記憶以前のことを資料を基に、想像を駆使して描き出していることに加え、さらに、時間を凝縮することにより、自伝小説ではなく、「ある家族の物語」として歴史的時間を描きながら、緊張感を保った本格小説になり得たのである。

（本学准教授）